総説

ビンタンの思出

大坪 徹 心*

Memories of the Binting

ÔTSUBO Tesshin*

私が最初にビンタンの名を聞いたのは昭和2年の春であつた。

当時私は古河電工九州電線製造所の経理係をしていたが当時の所長であつた故人藤本秀吉氏（後に大日電線専務取締役となり後幾何もなく惜しくも病歿された）と後に不思議にも同じ工場に所長になつた岡崎直太郎氏（現在健在）と古河鋳業の福地信世技師（かの有名な桜痴居士の令息にして専門の地質探鉱方面は勿論演劇等にも精しく特異の風格を持つて居られた方だが既に故人）とがボーキサイト探鉱の為ビンタン島に向つたことを知つたのである。

これより先、御存知の高橋本枝氏や上島清蔵氏は夙にアルミニウム工業の前途有望を予見し之が製錬方法の研究原料たるボーキサイトの確保に苦心して居られた矢先偶々外国雑誌に蘭領東リオー諸島にボーキサイトありと記載されていたのを読まれ当時蘭領バタム島（シンガポールの南方東リオー諸島の一角にあり）に有つた古河鋳業のゴム園勤務の安部忠蔵医師がジャワの首都バタビヤにあり勉強中なるを想起し同氏に調査させた結果、果してビンタン島附近にボーキサイト埋蔵の公算大なりとの報を受け斯くは3氏の派遣と相成つた次第である。

斯くて調査の結果はビンタン島に高品位のボーキサイ

トが多量に埋蔵せられて居ることが判明したので古河鋳業はオランダ政府に対し之が開発の許可を申請したけれ共却下されオランダ政府はビルトンの錫会社ニベムに開発させることとし其代り古河は日蘭商事株式会社を設立して昭和10年より30カ年に亘り日本にビンタンボーキサイトを輸入する権利を確保し三菱さん三井さんそれに台湾電力の協力に依つて先づ台湾の高雄に日本アルミニウム株式会社が創立せられ昭和11年より操業開始次いで昭和15年には日本軽金属株式会社が設立せられ其他住友さん昭和電工さんのアルミ原料としても逐次ビンタンのボーキサイトが使用せらるるに至つたことは御承知の通りである。

斯くの如くビンタンのボーキサイトと日本のアルミニウム事業の關係は極めて密接なるものがありこれは私が後に戦争中ビンタン鋳業所長になつて判つた事であるがビンタンボーキサイトは一部ドイツや濠州に送つて居たのを除き大部分は日本向であり選礦の如きも特に淡水で選礦する設備をして居つた様である。

斯様にして両者の取引も漸次順調に増加を見つたつた矢先昭和16年12月太平洋戦争勃発によりその輸入は一時中絶の已むなきに至つたのである。

御承知の如く日本軍は開戦後破竹の勢を以つて南方諸地域を席卷昭和17年2月ビンタン島をも占領前述の経緯もあつて古河鋳業はビンタンボーキサイトの採掘を命ぜられたので南方事業部を設け上島清蔵氏統轄の下に古河電工の安東俊暎氏を初代所長としてビンタンに派遣しその開発に当らせたのであるがその後戦局発展昭和18年に至りビンタンボーキサイトも年間100万屯に増産を要望（当時年産60万屯位）せらるるに至り当時古河電工台北支店長であつた私にビンタン鋳業所長転出が命令せられたのである。

そこで私は昭和19年3月1日台北を出発、空路シンガポールに飛び同3日ビンタン島キシヤンの古河鋳業所へ着任した。

爾来終戦迄ビンタンに於て私がやつた事は

- (1) ボーキサイトを年産100万屯に増産の計画を実施したこと

* 古河マグネシウム株式会社 取締役社長

The Furukawa Magnesium Co. Ltd., President.

(2) 古河鋁業関係のボーキサイト採掘と日本軽金属関係のアルミナ工場建設に関する終戦処理を円満に遂行したことである。

即ち私は昭和19年3月3日ビンタン鋁業所に着任するや直ちにボーキサイト増産計画実施が巧く行かないネットワークはどこにあるのかを検討しそれが屋外貯蔵場（といつても之は単なる屋外貯蔵場ではなくその下にベルトコンベヤーを通じ積取船入港の際ベルトコンベヤーの上に積石を落しスタッカーを経て船艀に流し込む設備になっていた）の拡張が順調に行っていない点に在る事を発見しこの点を打開する為関係者の積極的な協力を要請しその協力を得て間もなく屋外貯蔵場の拡張に成功し100万吨増産可能の体制を整えることに成功した。

然しその後戦局は日に月に敗戦の色を濃くして来たが元々ビンタン島には米は一粒もできないので私は万一に備えて米の輸入貯蔵に努め終戦当時従業員及び住民を約1ヶ年間支えることの出来る程度米の貯蔵に成功加うるにタビオカ、サツマイモ、野菜類確保の為7ヶ所約400町歩の農園を開墾しそこに主として支那人を移して之が栽培に当らせ亦た蛋白資源確保の為附近海面約10平方哩に亘り30ヶ所のケーロン（海上に作られた独特の漁獲場）を昭南特別市（シンガポール）より委託経営をし日々約15,000斤の魚獲をし之を従業員に実費を以て配給し余ったものは之を塩干魚として貯蔵して置いた私はまた終始低物価政策を堅持し米、野菜、魚肉も殆んど実費を以て配給しインドネシア人が特に好むコーヒーの如きは終戦時シンガポールでは1杯50円乃至100円になった時でも1杯5銭以上には上げさせなかつたのである。

それから私は万一の場合を考慮して終戦直前インドネシア人及び支那人に治安維持会を結成させ私が相談役となつて自治的に治安を維持させることにしたが之は終戦時現地がオーストラリア軍に接収された時非常に大きな効果を挙げて呉れた事は幸いであつた。

不幸にして昭和20年に至つて戦局は愈々不利となり内地からのボーキサイト積取船は全く影を絶ちその間オーストラリア特攻隊の侵入が頻発し共シビリヤンも銃を取つて防衛に当つた事もあるし同年4月にはビンタン、シンガポール等南方諸地域に居た古河関係106名の有為の社員が阿波丸で遭難するという悲惨事が起つたり思出は尽きない。

またそれ迄第7方面軍建設隊の名に於て建設が進められていたビンタンアルミナ工場もセメント工場、煉瓦工場発電所、鉄道、築港、製材所、造船所等はでき上つたが肝心のアルミナ工場は遂にでき上るに至らない儘解散せられ同年4月1日より日本軽金属ビンタン工業所として之を受け継ぎ建設は継続され私は所長として此方の重荷を負う事になつたが遂に本工場の建設を見ずして終戦を

迎えたことは返す返すも残念至極であつた。私が終戦を知つたのは昭和20年8月17日であつた。

そこで私は早速原住民及び支那人従業員を集めてアメリカは原子爆弾を広島や長崎に投下し軍に関係なき一般国民をも死滅せしむるに至つたので日本政府は斯くの如き戦争を継続す可きではないとして戦争を止める事にしたと説明したところ皆よく諒解して呉れた。

私は終戦処理に際しては古河鋁業及び日本軽金属が預つて経営して居たボーキサイト採掘事業及びアルミナ工場建設は平和復旧後は旧経営主に返還し広く世界のため役立つて貰わなければならぬから旧経営者に引継ぎ返還する迄は大切に之を管理する責任ある事を痛感したので終戦後10月7日オーストラリア軍に接収せられ旧経営主ニベム会社に引継ぎ返還する迄は操業を継続し賃金を支払い治安の維持に任じたのである。

昭和20年10月7日オーストラリア軍は接収の為キジャンに上陸私は旧経営者ニベムに書類を以て引継を了し8日軍艦にてシンガポールに運ばれ、10日シンガポール郊外18哩のジュロンに抑留されるに至つた。

当時ジュロンには約8,000人の邦人シビリヤンが抑留されていたが私はビンタン組600人と共にその中に入れられ第19町会を組織しその町会長となつた。

そして英軍の抑留者管理の様子をジツト見ていたが将校1名下士2～3名、兵7～8名位の少数で誠に手際よくやつた。

即ち日本軍のように無闇にやかましい事を言うでもなく抑留者に町会を作らせ各町会から代表者を選出させてその代表者会議を巧くコントロールし、細かい事は一切之にまかせ唯法3章式に抑留者の衛生（台所と便所を清潔にすること）男女間の風紀（男女の同居を許さぬこと盗難の予防（当時英軍管理の食糧等を盗むことの予防）とゴムの木を傷つけることを堅く禁止するのみで後は極めて寛大、抑留区域も別にサクを設けるでもなくこの河より向うはいかぬとか、あの山より外はいかぬとか言う程度だつたし、亦我々が野球をやつたり演芸大会をやつたりすることは自由であつた。

その代り一旦禁止事項を犯すと厳罰を以て臨んでいた私の隣の町会で或る邦人が白昼英軍管理の食糧を盗んだことを発見せられその場で銃殺せられた実例があつた。

是等によつて私は英国植民地統治のやり方の一端をのぞき見ることが出来た様に思えてならなかつた。

当時我々が内地に帰れるのはズツト遅れて早くても昭和21年遅ければ昭和22～23年頃になるのではなからうかと想像していたので私は長期滞留の準備に着手し小規模ながらダム建設、農地の開墾、養魚等を計画し幸い私の組には土木、建築、電気、機械、化学は勿論農業漁

業に関する技術者、それに医師までも居たので是等の人を動員して是等計画の実施に奉仕した。

私共が最初シュロンに入つた時は私共の町会となる建物は荒れ果て電灯さえなかつたので早速電気の技術者に働いて貰つて5馬力のディーゼル発電機を据付け電灯をともし管理の英軍兵士からも大いに感謝された事を記憶しているがこれは恐らく世界最小の発電所ではあるまいか。

そして同年11月18日小規模ではあるがダムの建設が終つたところで思いがけなく急に私共は内地に帰れることになつたのである。それは当時大安丸という船が（大安と云うときこえは良いが実は大変なボロ船であつた）が急に内地に帰れることになつたが当時軍隊で帰えせるものがないのでシビリヤンの内老人、婦人、子供を除き約3,400名が帰れると言うので我々は飛び上つて喜んだものである。早速会議の上抽籤によつて抑留者の約半数が帰る事に決定私は夫等の人々と一諸に（後に通産次官に

なられ現に八幡製鉄の取締役をして居られる平井富三郎氏や現に通産省公益事業局の瀬川配電課長も同航された組である）昭和20年11月21日思い出深いシンガポール港を出帆、大安丸は船足遅くヤツト12月7日瀬戸内海の大竹港（広島県）に到着した。そこで早速入京し度く心は矢竹にはやれども仲々汽車に乗れず東京に着いたのは12月9日、当時私のいでたちは白の夏服にヘルメット帽、持つて帰つたものは手ぬぐい1本と言うあわれな姿であつたので挨拶に行つた時日軽や古河鋳業古河電工の皆さんは定めしびつくりした事であろう。

私は早速日軽本社に落付いて帰還者の復職退職手当の処理等後始末を完了して翌21年4月古河電工に復帰したのである。

今や終戦後十有余年ビンタンからも引続きボーキサイトが輸入され日本のアルミ工業の発展に大いに寄与している事と思ひ合せて往時を追懐して感慨一入深いものがある。